

## 『蜻蛉日記』下巻の「女絵」

——「養女求婚記事」に見える連関性を中心に——

庄司敏子

Abstract

## 一、はじめに

従来『蜻蛉日記』下巻についての研究は、その叙述から作者の兼家に対する思いを読み取ろうとするような方向にほぼ限定されていたようである。しかし、福家「二〇一一」が「虚構の世界を創出するに至った、書き手の書かれざる内面を推測することで、作品の文学性を担保してきた部分があるのではないだろうか。つまり、書き手の内面を中心化することで、作品上の問題をすべて書き手の問題、作者の問題に解消している部分があるのではないだろうか」と指摘する通り、こうした視点以外から下巻を捉えてゆく必要があるように思われる。そこで、これまでに稿者は作者の内面、心情などの推測に拠らないように留意しながら『蜻蛉日記』下巻の考察を進めてきた<sup>1)</sup>。下巻には、従来論じられてこなかった工夫や試みが多くあるのではないかという見通しを稿者は持っている。

『蜻蛉日記』下巻に含まれる「養女求婚記事」<sup>2)</sup>の中に、道綱が速度のもとから「女絵」を持ち帰り、その絵に道綱母が和歌を書きつけて返す記事がある。まずは以下に本文を挙げる。

助を明け暮れ呼びまとはせば、常にものす。(a) 女絵をかしく描きたりけるがありければ、取りて、懐に入れて持てきたり。見れば、(b) 釣殿とおぼしき高欄におしかかりて、中島の松をまぼりたる女あり。そのもとに、紙の端に書きて、かくおしつく。

いかにせむ池の水波さわぎては心のうちのまつにかからば

また、(c) やもめ住みしたる男の、文書きさしてつらづえつきて、もの思ふさましたるところに、

ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしもの思ふさましたるところに、

とものでして、(d) 持て帰り置きけり。(天延二年四月、三三九―三四〇頁) 当該記事に関する従来の議論は、これが確認できる初出例である「女絵」なるものの実態を探るもの<sup>3)</sup>、あるいは養女求婚記事から道綱母と兼家との関係性を読み取るための根拠を求めようとするものが多かったようである<sup>4)</sup>。本稿では、それらの先行研究を踏まえつつ、日記作者の内面を探るような方向よりも、本文の表現とそこに記されている事象をより丁寧に捉えることで、その工夫のありように迫ってゆきたい。

傍線部 (b) (c) それぞれの絵と、そこに添えられた道綱母の詠歌について、従来は作者と兼家との姿を重ねたり、あるいは作者と速度との姿を重ねたりするような読みがなされてきた。確かに (b) につけられた和歌については、兼家あるいは速度を待つ道綱母の姿を想起できるかもしれない。しかし、(c) は男の姿が書かれた絵に女の視点から詠まれた和歌を書きつけているところから、(b) と同様に画中人物に感情移入して詠んだと見るだけでは把握し難いのではないか。

そこで本稿では、特に (c) の絵の構図と、そこに添えられた和歌の表現を再検討することで、当該記事が養女求婚記事、ひいては『蜻蛉日記』下巻においてどのように位置付けられるのかを考察する。さらに、これまでの養女求婚記事における表現の検討もあわせて、下巻の持つ、上巻および中巻と

異なる性質について考えてゆきたい。

## 二、「女絵」と和歌

傍線部 (a) には、道綱が女絵を懐に入れて遠度邸から持ち帰ったことが、また傍線部 (d) には、道綱が女絵を遠度のもとに戻したことが記されている。その書きぶりは、あたかも道綱が自らの意志で自発的に行ったかのようなが、果たしてそのようなことがあり得たのだろうか。川名「二〇〇〇」では、「この絵が遠度自身からの発信であるかは不明瞭」と述べつつも、遠度からのメッセージ性に言及している。遠度から道綱母へのメッセージがあつたとすると、絵の移動が道綱独自の判断で行われたものであるはずがない。道綱と遠度、および道綱と道綱母との間であつた何らかのやりとりが省略されていると見るべきである。すなわち、女絵は遠度から道綱を介して道綱母のもとへもたらされ、道綱母から道綱を介して遠度のもとへ戻されたのである。さらに川名論文では、道綱母が和歌によって絵に描かれた男女の関係性を作り上げ、自分と兼家との関係をそこに反映させようとしたことが論じられている。

しかし、ここで注目したいのが、道綱母が歌を付けた後、絵が遠度に返却されたという点である。ここに、絵に込められた遠度からのメッセージ性だけでなく、道綱母から遠度へのメッセージを読み取ることも、おそらく可能であろう。つまり、当該記事で絵に添えられた和歌は、道綱母から遠度への返歌の形をとっているとは考えられないだろうか。

傍線部 (b) 「中島の松をまばりたる女」の構図からまず連想されるのは、来ない男を待っている女のイメージである。しかし道綱母は、「松」を「待っている」意ではなく、「あだし心」を表す「末の松山」に詠みかえた和歌を添えている。これは典型的な、贈歌の意を翻して返歌とする贈答歌の切り返し方に則っていると言えよう。傍線部 (c)、やもめの男が手紙を書きさしている絵についてはさらに明確である。絵は「もの思ふさましたる」男の姿であると説明されている。しかし、道綱母はそれを多数の女のもとへ手紙を書き散らしている男の姿と捉えて和歌をつけたことがわかる。絵と和歌の状

況が異なることが明確に記されているのである。

絵に和歌を添える行為については、池田「二九八四」、池田「一九八五」に詳しい。池田「一九八四」では、私的な享受に用いられる「紙絵」について、「図様そのものが物語絵のそれに直接関係する訳ではないが、日常的な営みの中で、絵を描くこと、楽しむこと、特に和歌をそれに詠み込むことの浸透ぶりを十分に理解しておく必要があるのではなからうか」と述べられている。また、「歌絵」の存在も参考となる<sup>5)</sup>。伊井「一九九二」は「歌絵」の「いわば絵と歌による贈答歌が成り立つ」性質に言及している。ここにも、絵と和歌との密接な在り方がみとめられる。また同論文では、『紫式部集』および『四条宮下野集』における「歌絵」の用例から、「その歌絵から、下野はどのような発想の歌を詠むのか、そこに小民部の興味があつたのだといえよう。宣孝として自分の思いを古歌に託し、それをそのまま伝えるのではなく歌絵にして遣わしたわけで、その絵を解釈して返してくる紫式部の歌に彼はもつとも関心があつたはずである」と論じている。いずれも『蜻蛉日記』より後代の例であるが、文才で名の知れた女性に、その返歌を期待して絵を渡したという点は注目できるだろう。一〇世紀後半の「女絵」がどのようなものであつたのかを知ることはできないが、先に言及したように、絵に遠度からのメッセージ性を認めるのであれば、当該記事の「女絵」はある意味で「歌絵」的な性格を持つとも考えられる。すなわち、当該記事の「女絵」が、道綱母からの返歌を期待して遠度邸から届けられたものであつたことが想定できるのである。

『蜻蛉日記』中で絵に和歌を付ける例といえ、中巻における屏風歌詠進記事が思い出される。安和二年八月、師尹五十賀の際に屏風を作るということで、頼忠から依頼を受ける記事である。

八月になりぬ。そのころ、小一条の左大臣の御とて、世にののしる。左衛門督の、御屏風のことせらるるとて、えさるまじきたよりをはからひて、責めらるることあり。絵のところどこかきいだしたるなり。いとしらじらしきこととて、あまたたび返すを、責めてわりなくあれば、宵のほど、月見るあひだなどに、一つ二つなど思ひてものしけり。

(安和二年八月、一八四頁)

兼家を取り巻く状況が変化する安和年間に、実頼息である頼忠の依頼によって道綱母が歌を詠んだという点についてはさまざま議論がある。いづれにしても、この屏風歌詠進が道綱母の歌人としての才能を認めた上で要請されたものであるという見解は揺るがないだろう。当時宮仕えをしていない女性が屏風歌を詠進する例が具体的には確認できないことも、その証左であるといえる。こうした中巻の記事を踏まえると、下巻の女絵記事も、道綱母の和歌の才能を認めた上で、遠度がその和歌を期待したものと考えてよいのではないだろうか。また、養女求婚記事における遠度については、これまで道綱母との「男女の交渉」が盛んに論じられてきたように、養女ではなく道綱母とのやりとりが中心に記されている。遠度は、道綱を介して、あるいは直接道綱母の元を訪れて交渉を楽しんでいたと読むことができるのである。この点から見ても、遠度が道綱母の和歌を求めることは不自然ではなかったに違いない。

なお、屏風歌以外で、絵に和歌を付けるよう依頼があったと思われる例も、若干見出される。『三十六人集』収載『能宣集』三二二番詞書には、「きさいの宮のおほせごとにて、ゑにつけさせたまふ、たかき山のいと心ぼそくて、人もほふしもむげになし」と記されている。また、『長能集』八〇番詞書には、「同じ院の、御手づからかみゑかかせ給ひて、人々に歌つけさせたまひしに、秋の前裁さきみだれたるもみぢおもしろき所に」とある。「同じ院」とは花山院のことである。花山院については、『公任集』三二二番詞書にも「花山院のかかせたまへるかみゑにうたつけて給はせたりけるに、人々さるべき所はつけはてなかりければ、人のつるかひてふみをひろげてあたる所に」との記述が見られる。いづれも非常に高貴な人物からの依頼ゆえ、『蜻蛉日記』下巻の当該記事と同様の例とは言い難い面もあるが、絵と和歌とが密着する例として注目しておく。

ところで、当該記事では女絵につけられた道綱母の詠歌が遠度のもとに渡るわけだが、養女求婚記事中には同様に、道綱母によって書かれたと思しき和歌が近い人々の手に渡ってゆく記事がある。「いまさらにいかなるこま

かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」という和歌である。この和歌は遠度によって破り取られ、持ち出されることになる。その後、持ち出された和歌は兼通にまで伝わっていたことが知られるのである。

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなるこまか」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。  
(天延二年五月、三四八頁)

宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうとおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。「あやし、誰がぞ」と言へば、「なほ御覧ぜよ」と言ふ。開けて、火影に見れば、心つきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなるこまか』とありけむはいが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつてしがな  
あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。……  
(天延二年十月、三五四―三五五頁)

こうした和歌の流出は、兼家の兄弟という近い関係の人々の間での和歌享受のさまを示すものと考えられ、それが再構成されて記述されているという特徴がここには指摘できる。女絵の記事も、メッセージ性を持つ絵とそこに付された和歌が他人の手に渡ってゆく事態を、遠度の積極的関与や道綱母の反応をあえて記さずに書いている。この点において、当該記事は「いまさらに」詠の和歌流出記事と類似するものと言えよう。

以上、女絵記事において、遠度が絵をよこす行為それ自体が、道綱母の和歌を求める行為であった可能性を考察した。次節では、当該記事が一連の求婚記事中でどのように位置づけられるのかを、女絵の構図を検討することによって考えてゆく。

### 三、「やもめ」の構図と養女求婚記事

一般的な女絵の構図として、池田「一九八四」に次の五つのパターンが挙

げられている。

(一)垣間見、(二)女の家を訪れ面会を求める男、(三)対面し語り合う男女、(四)独り住みの男、或いは女、(五)手紙を書く男、或いは女

また、「やはり人家は重要で、画中人物はその外から見える場所に配されていたのではなからうか。例えば、簀子縁、簾を巻き上げた廂の間、釣殿、籬のかたわら、といった伝統的な場所が想像される」とも述べられている。当該記事の構図は、「釣殿とおぼしき高欄におしかかりて、中島の松をまぼりたる女」が「釣殿」という場所に、「やもめ住みしたる男の、文書きさしてつらづゑつきて、もの思ふさましたる」が(四)および(五)のパターンに該当する。いずれも特にかわった構図ではなかったようである。

このような一般的な構図の絵が日記中に叙述されたのはなぜだろうか。先行研究では主に、二枚の絵に託された男女の関係について論じられている。例えば、守屋「一九九二」では、「兼家に執する心の強い道綱母が、絵柄に触発されてゆくりもなくその心の内を歌に託して表出した体のものと見做すべきだろう」とされ、また川名「二〇〇〇」では、「この女絵二図には男の求愛の意図が濃厚に提示されていると見られる…(中略)…：この、絵に裏打ちされた道綱母の歌が醸成する物語には、兼家の存在が響かされてこそ彼女にとって感情移入し得る画面となるはずである」と論じられる。こうした諸氏の見解には首肯できる点もあることは確かである。(b)の絵と和歌については従来説がある程度みとめられるだろう。しかし、「はじめに」でも述べたように、道綱母の感情を投影しているという視点だけでは把握しきれない(c)の絵と和歌については、特に再検討を加える必要がある。以降、(c)の「やもめ住みしたる男」の構図について検討したい。

そもそも「やもめ」という語は和歌に詠まれる場合には恋愛の雰囲気を持つことも多い語である。当該の絵においても、「やもめ住みしたる男」を、養女あるいは道綱母の恋の相手としての速度と捉えることができる。また、一方で兼家の姿を重ねるといふ見解もある(守屋「一九九二」など)。こうした視点から「男」を速度あるいは兼家であると比定することももちろん可能であり、それらの視点は有効であろう。一方で、「やもめ」の絵に和歌が付

られた用例を私家集より掲出すると、恋とは異なるイメージがあわせて看取されることにも注意しなければならない。

絵ものがたりにねびたるやもめなるながめてゐたるところ

ながむればくもらぬ月のうらやましいかで浮世を出でて住むらん

〔公任集〕・三二四

「浮世を出でて住む」といった表現から、この『公任集』三二四番歌の「やもめ」の絵は寂しい情景を描いたものであり、ともすれば世を遁れているようにも捉えられるものだったと推測できる。ここで、(c)の絵についても同様の雰囲気を持つものであったと仮定するならば、この「やもめ」の絵と、次に掲げる当該記事直前の記述との連続性が見えてくるのである。

さくねりても、又の日、「助の君、今日人のがりのせむとするを、

もろともに寮に、と聞こえになむ」とて、門にもものしたり。例の硯乞へば、紙置きて出だしたり。入れたるを見れば、あやしうわななきたる手にて、「昔の世にいかなる罪をつくり侍りて、かう妨げさせ給ふ身となり侍りけむ。あやしきさまにのみなりまさり侍るは、なり侍らむこといとかたし。さらにさらに聞こえさせじ。今は高き峰になむ登り侍るべき」など、ふさに書きたり。かへりごと、「あなおそろしや。などかうはのたまはすらむ。うらみ聞こえ給ふべき人は、ことにこそ侍るべかめれ。峰は知り侍らず。谷のしるべはしも」と書いて出だしたれば、助ひとつに乗りてものしぬ。助のたまは馬、いとうつくしげなるをとりて帰りたり。

(天延二年四月、三三七―三三八頁)

これは、なかなか決まらない結婚の日取りにしびれをきらした速度が、道綱母を訪れて恨み言を述べる記事である。傍線部「今は高き峰になむ登り侍るべき」という速度の言葉は遁世の雰囲気を持つものであり、先に私家集の用例で確認した「やもめ」の構図とも似通っている。さらに、この記事には速度が孤独感を訴える様子が表現されている。これも「やもめ」の孤独な様子と響き合っているのではないか。つまり、求婚者である速度が「やもめ」としてのイメージを持って女絵の記事へと繋がっていることが指摘できるのである。女絵の記事は独立したものととして求婚記事中に置かれているの

ではなく、直前の叙述と連続性を持つものと考えられるのである。

また、波線部「例の硯乞へば、紙置きて出だしたり。入れたるを見れば、あやしうわななきたる手にて」という箇所では、速度の筆跡について言及されていることにも目配りしておきたい。後述するが、女絵の記事周辺には兼家の手紙を求める記事が置かれている。波線部は、こうした叙述とも緩やかにつながってくる表現であると考えられる。

#### 四、養女求婚記事における手紙と「女絵」

##### 「書かれたもの」をめぐる

次に、(c)の絵に描かれた「ふみ書きさして」という表現を手掛かりとして、女絵記事と前後の求婚記事との関連性を考えてゆきたい。手紙が絵に描かれるという現象は、先に引用した池田「一九八四」でも女絵の一般的な構図として挙げられていた通り、当時の絵によく見られるものだったようである。中でも特に私家集に見られる用例を挙げる。

やりみづのつらにきくさけり、をどこふみかく

あかれつつかげもみるべくみぎはなるきくにこひしき人はならなむ

〔中務集〕・二五

四条の後のさうしの絵によめる、をうなのけさうぶみかけるを、と  
もだちどものみれば

あきなればたれもいろにぞなりにける人の心につゆやおくらむ

〔重之集〕・一五

『中務集』一五番詞書は、一一番詞書に「三条のおほいまうちぎみ権中納言とつかうまつれる屏風の絵に」とあるので、絵の構図を説明したものとわかる。ここからも、手紙を書いている男の構図が存在したことが確認される。では、なぜこうした一般的な構図の絵について、下巻のこの箇所而言及する必要があったのだろうか。

ここで、養女求婚記事中に手紙に関わる記事が散見されることに注意する必要がある。手紙に関わる記事についてはすでに川村論文があるが、女絵の記事に見られる手紙については詳細な検討がなされていない。しかし、女絵

の記事が記される天延二年四月周辺の記事群には、特に兼家の手紙を求めるような記事が見られることには注意すべきである。それらは言うまでもなく、当該記事における画中の手紙とは表現の位相が異なる。だが、男が「ふみ書きさして」いる構図が、前後の手紙にかかわるやり取りを読者に想起させる機能を持つていると考えることは可能であろう。そもそも、養女求婚記事群は、手紙のやり取りを軸に展開しているともいえるだろう。手紙は養女求婚記事中でも重要な小道具なのである。当該記事の前後で、特に手紙を軸として話題が進んでゆく記事を次に掲げる。

さて、なほここにはいといちはやきこちすれば、思ひかくることもなきを、かれより「かくなむ、『仰せありき』とて責むると聞こえよ」とのみあれば、「いかでさはのたまはするにかあらむ。いとかしかましければ、見せたてまつりつべくて。御返り」と言ひたれば、「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとほるかになむなりにけるを、もし御心かはらずは、八月ばかりにもものしたまへかし」とあれば、いとめやすきこちして、「かくなむはべめる。いちはやかりける暦は不定なりとは、さればこそ聞こえさせしか」とものしたれば、返りごともなく、とばかりありて、みづから「いと腹立たしきこと聞こえさせになむ、まゐりつる」とあれば、…… (天延二年四月、三三三―三三四頁)

かくてなほおなじごと絶えず、「殿にもよほし聞こえよ」など常にあれば、かへりごとも見せむとて、「かくのみあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「ほどはさものしてしを、なかかかふはあらむ。八月待つほどは、そこにびびしうもてなし給ふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほし聞こゆるにはあらず。いとうるさく侍れば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものし侍るを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにも侍るかな。

いまさらにかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身をあなまばゆ」とものしけり。 (天延二年四月、三四〇―三四二頁)

以上の記事はいずれも女絵の記事と接近した位置にある。頻繁に養女との結婚の日取りについて迫ってくる速度に見せるための手紙を、道綱母が兼家に催促するものである。点線部「いかでさはのたまはするにかあらむ。いとかしかましければ、見せたてまつりつべくて。御返り」、さらには「かへりごとも見せむとて」といった箇所から、兼家の言葉を証明するものとして、実物の手紙そのものが求められていたことが窺われる。「書かれたもの」自体のやりとりという面からも、女絵の記事と前後の記事との連続性を捉えることができよう。

最後に、(c)の絵につけられた「ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも」の和歌についても見てゆく。この歌は、男が複数の女性に手紙を書き送っているさまを詠んだものである。前節で考察したように、絵に描かれた「やもめ住みしたる男」が速度と重なるとする、速度の浮気な様子を揶揄するものと見てよいだろう。こうした速度の様子は、七月中の十日ばかりになりぬ。頭の君、いとあざるれば、われを頼みたるかなと思ふほどに、ある人の言ふやう、「右馬頭の君は、人の妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれぬたまへる。いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒ぐなる」と聞きつれば、……

(天延二年七月、三五〇～三五二頁)

というように、一連の養女求婚が、速度が「人の妻」を盗むことで破談になるという結末を暗に示しているように見える。女絵の記事はこの結末が明らかになった後に執筆されたと見て差し支えないだろうから、「ささがにの」詠はこうした結末をほのめかすような内容として、この一連の養女求婚記事の中に置かれることになった可能性がある。あるいは当該記事の時点、すなわち天延二年四月における速度の状態——養女に求婚しつつも、一方で「人の妻」とも関係を持つとうとしていた状態——を示唆するかのような内容になっていともいえるだろう。「人の妻」とは誰なのか、また、いつ頃から速度とその女との交渉があったのか、確認する術がないため、どちらも明言することはできない。しかし、いづれにしても、当該記事は養女求婚の結末と対応していることが指摘できる。さらに、「人の妻」を盗むという速度の

行動は、「世にも言ひ騒ぐなる」とあるように噂になったようなので、同時代の読者にはこの記事の示唆するところが理解できたものと思われる。

和歌の表現を見ると、「ささがに」が菓を「掛く」行為に「書く」意が響いていると解釈できる和歌の用例は、すでに斎藤「二〇〇三」の指摘にある通り『蜻蛉日記』以前には見られない。一方、道綱母に関連するものは全三例あり、当該箇所以外の例は以下の通りである。

ささがにのいまはとかぎるすぢにてもかくてはしばしたえじとぞ思ふ<sup>10)</sup>  
(天禄元年六月、二二〇頁)

返事するをり、せぬをりの、ありければ  
かくめりとみればたえぬるささがにのいとゆゑかぜのつらくもあるかな

(道綱母集・二五・道綱)

「ささがに」ではなく「くも」という表現にまで目を向けると、『蜻蛉日記』下巻にはさらに次の用例が見出される。道綱と大和だつ人との贈答である。

大夫、例のところに文やる。さきさきの返りごとども、みづからのとは見えざりければ、恨みなどして、

夕されのねやのつまづまながむれば手づからのみぞ蜘蛛もかきける  
とあるを、いかが思ひけむ、白い紙にももの先して書きたり。

蜘蛛のかくいとぞあやしき風吹けば空に乱るるものと知る知る

たちかへり、

つゆにても命かけたる蜘蛛のいにあらし風をば誰か防かむ

「暗し」とて、返りごとなし。またの日、昨日の白紙思ひ出でてにやあらむ、かく言ふめり。

たちまのやくぐひの跡を今日見れば雪の白浜白くては見し

とてやりたるを、「ものへなむ」とて、返りごとなし。

(天禄三年八月、三〇五～三〇六頁)

こうした修辞について、斎藤「二〇〇三」は「……道綱母が、「くも」・「ささがに」が菓を「掛く」という常套的な発想に添えて歌いかける「書く」はみな、「書く」ことを望み促す、あるいはあちらこちらに書く意をあらわしていた」と指摘している。あわせて、右の道綱と大和だつ人との贈答記事に

おいて、波線を付したように「書く」行為だけではなく、何に、どのように書かれていたのかという点までも明記されていることがわかる。女の筆跡をめぐる展開の中で、「白い紙にももの先して書きたり」とあるので、大和だつ人からの和歌は筆跡がわからないように書かれていたものと推測される。

前節までで触れた遠度の筆跡が記される例、あるいは兼家の手紙そのものを求める例ともあわせて、『蜻蛉日記』下巻には「書く」行為だけではなく、それに付随する事柄、すなわち「筆跡」「紙」「硯」などにまで言及してゆく記事が増える傾向が認められよう。下巻冒頭に近い箇所「女房が「かはらけ」に歌を書きつける記事から始まり、幾度かに分けて記される道綱贈答歌群、そして本稿でも取り上げた養女求婚記事など、明らかに上巻および中巻よりも頻出する。女絵に描かれた「文書きさして」いる男の姿、および絵に書きつけられた道綱母の和歌は、こうした養女求婚記事群、ひいては下巻の特徴の中に位置付けられるのではないだろうか。

## 五、おむらじ

以上、女絵の記事について検討してきた。まず遠度が女絵を道綱母のもとによこす行為がそれ自体が道綱母の詠歌を求める行為であった可能性を指摘した。とりわけ(c)の絵の構図からは、当該記事が前後の記事との連続性を保って置かれている記事であることを明らかにした。また、(c)の構図が求婚記事における手紙を想起させ、そこにつけられた「ささがにの」詠が求婚の終焉部分と対応していることにも言及した。こうした点から、当該記事は養女求婚記事全体を象徴的に表しているものであると思われる。女絵は屏風絵とは異なり、多分に物語的な雰囲気を持つものであったようである。養女求婚記事のいわゆる「物語的」特徴を考えあわせても、やはり女絵の記事が一連の求婚記事の縮図となっていると考えられる。それが求婚記事の中に置かれることで、この部分は一種の入れ子構造になっているともいえるだろう。

さらに、「ささがに」が菓を「掛く」ことに「書く」意を掛ける和歌が道綱母によって絵に書きつけられたことは、当該記事が養女求婚記事のみなら

ず下巻に頻出する「書く」行為、および「書かれたもの」を記していく流れの中に位置付けられることを示すと思われる。下巻の個々の記事は、それぞれがある程度有機的に連関性を持っているようである。

従来、「記事の拡散」あるいは「主題の分裂」<sup>(1)</sup>などという否定的な面が論じられてきた下巻は、確かに中巻と比較すると、まとまった内容に仕上がっているとはとても言い難い。しかしこれまでの検討から、個々の記事、あるいは記事群については有機的な連関性がある程度は認められることが明らかになった。下巻では上巻・中巻以上に人間関係が複雑化するため、従来なされてきたような兼家との関係の書かれ方に議論を収斂してゆくような方法のみを採る限り、下巻の評価は低迷し続けるに違いあるまい。兼家の兄弟たち、あるいは道綱・養女らという横と横に広がった関係の中での記事の集成が『蜻蛉日記』下巻なのではないだろうか。そのような記事群の中で、作者の工夫あるいは試みを再検討してゆくべきであろう。養女求婚記事だけではなく、下巻に収められているそれぞれの記事について検討を進めることが、今後の課題である。

※『蜻蛉日記』本文は宮内庁書陵部蔵桂宮本（桂宮本蜻蛉日記）笠間書院一九八二）により、私に校訂したものである。便宜上、引用本文末尾の括弧内に新編全集（土佐日記 蜻蛉日記）小学館一九九五）の頁数を付記した。

※和歌の引用については、『新編国歌大観』および『私家集大成』により、適宜表記をあらためた。

### 《注》

(1) 庄司「二〇一〇」では、道綱母以外の人物も上巻を意識した和歌を詠んでいたとおぼしきことを明らかにした。また、庄司「二〇一四」では、いわゆる「養女求婚記事」中で遠度によって破り取られた手紙に注目し、道綱母の詠歌が兼家の兄弟間へ流出していく様子を再構成して記述していることについて論じた。これらも、なるべく「作者の内面」を探るといふ視点から一歩引いて下巻を読み解こうという試みである。

(2) この記事は従来「遠度求婚譚」と称されてきたが、倉田「二〇〇六」による「物語での用法、すなわち『うつほ物語』の「あて宮求婚譚」、『源氏物語』の「玉鬘求婚譚」などとする把握の仕方に倣い、以下、「養女求婚譚」として理解していきたい。

との指摘を参考にし、さらに物語・説話の話を示す際に用いられる「……譚」という語を避けて、「養女求婚記事」と呼ぶこととする。

(3) 池田「一九八四」、池田「一九八五」などがある。

(4) 守屋「一九九二」、川名「二〇〇〇」などがある。

(5) 「歌絵」については、川村裕子氏より御教示いただいた。なお、『蜻蛉日記』に先行する作品における「歌絵」の用例としては、『後撰集』一三三四番歌詞書に「みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじてうたゑにかかせ侍りける」(離別・よみ人しらず)とある。

(6) 渡辺「一九八七」、宇留田「一九八七」、守屋「一九九四」、高野「二〇〇〇」などがある。

(7) 主なものに、石坂「一九八一」、川村「一九八四」、守屋「一九九二」、大内「一九九三」、金子「一九九三」、川名「二〇〇〇」などがある。

(8) 「いまさらに」詠の流出に関わる事態については、庄司「二〇一四」においてすでに論じた。

(9) 川村「一九八四」、川村「一九九六」、川村「二〇〇三a」、川村「二〇〇三b」、川村「二〇一〇」。

(10) 当該和歌の「かくて」の掛詞は、注釈書によって以下のように説が分かれている。「掛く」と「斯く」……新編全集

「掛く手」と「書く手」……全注釈  
「斯くて」と「書く手」……新大系

「さすがに」および「すぢ」の語との関連から全注釈の解釈が妥当かもしれないという見通しを持っているが、詳細な検討は今後の課題とする。

(11) 木村「一九六一」、木村「一九八二」では、下巻で主題が分裂し、それが拡大・拡散しているのだと述べられている。また、守屋「一九七五」、水野「一九九五」でも木村論文を一旦は認めた上で、下巻についての議論が展開されている。

### 《参考・引用文献》

伊井 春樹「一九九二」『歌絵について』橋本不美男編『王朝文学 資料と論考』笠間書院

池田 忍「一九八四」「王朝「物語絵」の成立をめぐる——「女絵」系物語の伝統を考へる——」『東京女子大学読史会紀要 史論』37

池田 忍「一九八五」「平安時代物語絵の一考察——「女絵」系物語の成立と展開——」『学習院大学哲学会誌』9

石坂 妙子「一九八一」「世の中」の変容②——遠度求婚譚——『文芸研究』97 日本芸研究会

宇留田初実「一九八七」「蜻蛉日記中巻「屏風歌詠作」の記事をめぐる——『中古文学』40 中古文学会

大内 英範「一九九三」「蜻蛉日記下巻の一考察——遠度の養女求婚記事をめぐる——」『日本文学論究』52 国学院大学国文学会

金子富佐子「一九九三」「蜻蛉日記」下巻試論——遠度求婚の「記事の方法」——『日記文学研究 第一集』新泉社

川名 淳子「二〇〇〇」「男と女の媒体としての「女絵」——『蜻蛉日記』下巻「女絵」の記事から——」『論集日記文学の地平』新泉社(↓川名「二〇〇五」)

川名 淳子「二〇〇五」「物語世界における絵画的領域——平安文学の表現方法——」ブリュッケ

川村 裕子「一九八四」「蜻蛉日記下巻の一考察——遠度求婚譚をめぐる——」『立教大学日本文学』52

川村 裕子「一九九六」「蜻蛉日記の文——平安時代の文の交換を中心に——」『立教大学日本文学』77

川村 裕子「二〇〇三a」「和歌における装飾——『蜻蛉日記』『源氏物語』の「陸奥紙」再見——」兼築信行・田淵句美子編『和歌から歴史を読む』笠間書院

川村 裕子「二〇〇三b」「蜻蛉日記」下巻「遠度求婚譚」の文を読む 伊藤博・宮崎 莊平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎

川村 裕子「二〇一〇」「王朝文化と手紙——『蜻蛉日記』下巻の奇妙な手紙——」『秋澤互・川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社

木村 正中「一九六一」「蜻蛉日記下巻の構造」日本文学協会『日本文学』10・4

木村 正中「一九八一」「蜻蛉日記の主題」『二冊の講座』編集部編『蜻蛉日記』有精堂

倉田 実「二〇〇六」「蜻蛉日記の養女迎え」新泉社

斎藤菜穂子「二〇〇三」「蜻蛉日記成立の基底——「書く」という語から——」『国文学研究』141 早稲田大学国文学会(↓斎藤「二〇一〇」)

斎藤菜穂子「二〇一〇」「蜻蛉日記研究——作品形成と「書く」こと——」武蔵野書院

庄司 敏子「二〇一〇」「蜻蛉日記」下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」——上巻との照応——『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56・3 早稲田大学大学院文学研究科

庄司 敏子「二〇一四」「蜻蛉日記」下巻「養女求婚記事」における手紙——破り取られた「いまさらに」詠を中心に——『古代中世文学論考 第二十九集』古代中世文学論考刊行会 新泉社

高野 晴代「二〇〇〇」「道母の歌人意識——女性歌人における屏風歌詠進の視点から——」『国文目白』39 日本女子大学国語国文学会

田島 智子「二〇〇七」「屏風歌の研究 資料篇」和泉書院

福家 俊幸「二〇一一」「あとかぎ」『王朝女流日記を考へる——追憶の風景』福家俊幸・久下裕利編 武蔵野書院

水野 隆「一九九五」「蜻蛉日記下巻の記事構成の方法に関する試論——巻末歌集重複歌「今さらに」を中心に——」上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編『王

朝日記の新研究』笠間書院

守屋 省吾「一九七五」『道綱母における私家集纂集の他律的要因』『蜻蛉日記形成論』

笠間書院

守屋 省吾「一九九二」『蜻蛉日記下巻考——遠度求婚の経緯をめぐって——』『論集日

記文学 日記文学の方法と展開』笠間書院

守屋 省吾「一九九四」『屏風歌詠進のこと——『蜻蛉日記』小一条左大臣師尹五十賀

に関連して——』『立教大学日本文学』72

渡辺 久寿「一九八七」『蜻蛉日記』研究ノート——師尹五十賀屏風歌の記事の意義に

ついて——』『山梨英和短期大学紀要』20

## “Onna-e” in the Third Volume of *Kagerō no nikki*: Significance of the “Adopted Daughter’s Courtship” Entry

Toshiko SHOJI

In the third volume of *Kagerō no nikki*, as part of the “adopted daughter’s courtship” entry, there is an episode in which Michitsuna brings back from Tōnori’s house what the text calls an “onna-e” picture, on which Michitsuna no Haha writes a poem before sending it back.

The majority of the previous research on this entry has either sought to determine the exact meaning of the term “onna-e” (this being the earliest known example of its use), or used the episode to justify readings of the “adopted daughter’s courtship” entry as elucidating the relationship between Michitsuna no Haha and Kaneie. In this article, however, moving away from attempts to understand the mind of the diary’s author, I instead carefully analyze this episode’s language to determine the character of the larger entry in which it is contained.

More concretely, by reexamining, in particular, the composition of the picture (a widower writing a letter, deep in thought), and the language of the poem written on the picture, I conclude that this episode can be characterized as a microcosm of the “adopted daughter’s courtship” entry.

In addition, building on my previous studies of the language used in the “adopted daughter’s courtship” entry, I also consider the character of the third volume as a whole, showing that it is, indeed, possible to discover a certain degree of mutual organic connection between the various episodes, or episode groups, that it contains.